河東碧梧桐

俳句シリーズ

人と作品

阿部喜三男著

阿部喜三男著

俳句シリーズ 人と作品 6

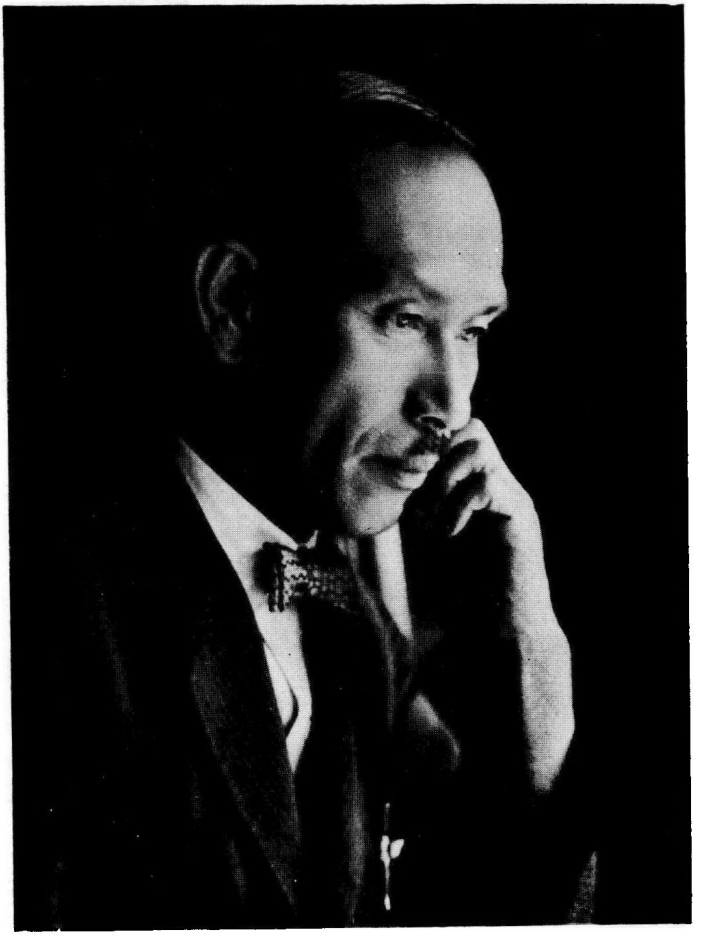
俳句シリーズ　河東碧梧桐　人と作品　6

昭和三十九年三月十五日　初版印刷
昭和三十九年三月二十日　初版発行

定価　六八〇円

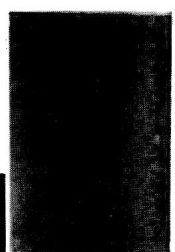
著者　阿部喜三男
発行者　南雲正朗
印刷者　株式会社大平印刷社

発行所　南雲堂桜楓社
東京都千代田区西神田二ノ二九
電話九段(261)八二三六―九番
振替東京四六八六三番
（南雲堂気付）



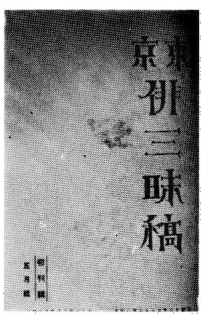
晩年の碧梧桐

昭和6年子規忌（前列・左から二人目）中村烏堂・碧梧桐・正岡律子（後列・左から三人目）風間直得，六人目著者。



『海紅』創刊号

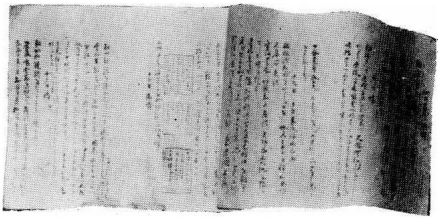
『碧』創刊号



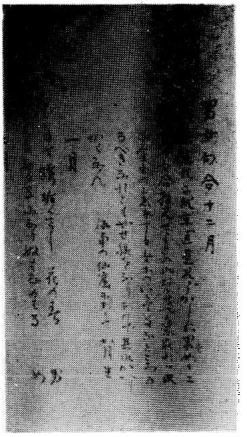
『東京俳三昧稿』創刊号

『三昧』創刊号

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



明治28年の「寓居日記」（22ページ参照）



明治25年筆
（16ページ参照）

大根を煮た夕飯の子供達の中になる　碧
（96ページ参照）

大仏蕨餅奈良の春にて木皿を重ね　碧
（99ページ参照）

山川草木悉有仏性　碧書

俳諧漫話
其角俳句評釋
河東碧梧桐著
俳句研究
日本俳句鈔
敗帳釣草
新傾向句集
碧梧桐著
河東碧梧桐著
雙雅房版
日本俳句鈔

碧梧桐編著の一部

まえがき

碧梧桐は二十歳代で、早くも子規下の新派俳句の代表的俳人として、虚子と共に天下に名を知られた。虚子とは少年時代からの友人で、遊学も放蕩も共にした親友であったが、また、宿命的に対立する友でもあった。

子規後の近代俳句が碧虚二子によって推進されたことは周知の事実であるが、子規が没すると、まず俳壇をリードした者は碧梧桐であった。三十歳代のかれは子規後の新風を起そうと蹶起し、全国を旅行し、いわゆる新傾向時代を俳壇にまき起し、明治末年の俳壇はかれの独壇場のごとき観を呈した。

大正期に入ると、かれの急進調は自由律俳句に進み、やがて無季にも進んだ。その頃は虚子の俳壇復帰があり、碧門からはすでに乙字、井泉水らが分裂していて、四十歳代にして早くも昔の勢望を失ったが、なお『海紅』による一雄だった。その『海紅』の一碧楼とも別れた碧梧桐は、孤独になって外遊をし、帰朝して個人雑誌『碧』を出したが、また迎えられて『三昧』による活動を開始した。

この止まるところがないような碧梧桐が、還暦の年に自ら落伍者として俳壇引退を宣言するに至ってしまった。虚子が俳壇に隆々たる成功をしていた時である。この悲劇的終局は、昭和十二年の急逝によって早くも結ばれたが、かれの俳人としての生涯の中には近代俳句のあらゆる問題が煮えくりか

えされたといってもよいようなものがあり、まことに史上にも稀有な俳人としてのあとを残した。

碧梧桐は俳人たるのみならず、ジャナリストとしては政治・社会・美術・演劇・文学一般等の評論も書いて重きをなし、小説も書き、蕪村研究もし、旅行家・登山家としても屈指の人だったし、能楽は玄人の境に入り、書道はまた一家をなした人であった。だが、終末が敗北的であったためか、全集はもとより完全な句集も出ていず、単行本として伝記が書かれるのも本書がはじめてである。

私は縁あって晩年の碧梧桐にわずかに接したことがある。それが本書執筆の一縁ともなったが、それだけにまた我田引水に傾かぬようにと、できるだけ多くの人の評論や解説を引用した。それもこの機会になるべくかれの全貌を正当に書きとどめたいと願ったからであるが、非力の上に書くべきことが非常に多いので、ここでもやはり概略に止まらざるを得なかった。この人の周辺を描くことも、この人の伝記のため、また本書にためには必要であり、味を深くするものなのであるが、紙幅の制限があるので、その辺はことに省略せざるを得なかった。

作家研究篇では伝記を主として叙し、その中で挙げた句の中の百句について、※印を付して鑑賞篇でとりあげた。

なお、上記のごとく、多くの方の言説を引用させてもらったが、これも紙幅の関係で、一切敬語を省略させていただいた。

昭和三十九年一月十五日

著　者

目

次

まえがき

作家研究篇

一、子規下時代……九
誕生と家族……9
幼少時と子規……10
中学時代と虚子……11
俳句との初縁……12
最初の上京……14
小説への失望と句作……16
三高時代……17
二高転学と退学……20
子規従軍と「寓居日記」……22
新進俳人……24
北陸の旅と躍進……27
新派の代表……28
処女出版……30
結婚……32
自力抬頭……34
子規逝く……36
二、新傾向時代……四〇
碧梧桐時代始まる……40
碧虚の対立進む……42
俳三昧句会……44
全国旅行開始……46
仙台まで……48
仙台以北……51
北海道その他……53
一次旅行の終り……55

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

新傾向論起る……57
全国旅行二次開始……61
九州から玉島へ……66
旅行のあと……70
新傾向論進む……59
城崎から山陰へ……64
無中心論と旅の終末……68
碧派の分裂……73

三、自由律時代……七六

『海紅』創刊……76
人間味の充実……81
大正日日新聞……85
『海紅』を去る……91
『東京俳三昧』稿……94
「我等の立場」……99
衰・退……104
直接的表現……79
支那に遊ぶ……83
外遊……88
個人雑誌『碧』……92
『三昧』発行……96
東奔西走……101
俳壇隠退……106

四、晩年と総収……一〇九

隠退後……109
新居と急逝……113
峻厳と温情……117
多角性……121
無季自由律……126
せんべ屋計画……111
真率……116
偏癖……119
俳人として……124
結び……129

鑑賞篇……一三三
作品抄……二三五
紀行篇……二四六
参考文献……二六一
年譜……二六九
俳句索引……二八一

作家研究篇

一　子規下時代

誕生と家族

明治六年（一八七三）二月二十六日、碧梧桐は伊予松山千舟町七十一番戸に、河東静溪の五男として生まれた。さいわい母乳は他の子の時と違ってよく出たが、春なお寒く、父は深夜に必ず起きて妻の夜具に注意し、乳児に気を配ったという。（静溪日記抄）

河東家は松山藩士で、もとは忍び役（間諜）の家柄であったが、祖父虎臣（号竜潭）の頃から漢学を修め、静溪（名は坤）は朱子学派の学者として藩学明教館の教授に任ぜられ、幕末騒乱の際には藩命を帯びて諸国の情報探求に奔走し、明治元年には小参事に任ぜられ、百石を賜っていた。廃藩後は久松家（旧藩主）の松山詰家扶をつとめ、明治十三年頃から家塾千舟学舎を開き、以後門下を訪う多数の子弟を教育した。

静溪には六男三女の子があった。長女与、長男鑑、次男鎮は先妻常代の子。常代没しての後妻せいに三男鍛、二女伸、三女静、四男銓、五男秉五郎（碧梧桐）、六男稼六郎が生まれた。

与は渡部氏に嫁し、鑑は明治十七年（二七歳）に没したが、その子の濬太郎が松山の家を継いだ。鎮は松山で小学教員を勤めた（明治四二年没）。鍛は母方の竹村氏をつぎ、東大文科大学専科を出て、兵庫県師範学校に

勤務した人で、黄塔と号し、子規や芳賀矢一との親交があった。伸は西宮(兵庫県)の御手洗常太郎(小学教員)に嫁し、静は松山の稲川元善(小学教員)に嫁した。静は早く未亡人になったので、後よく碧梧桐の家庭的な世話をしてくれた姉であった。すぐ上の兄銓は三歳の年長だが、可全と号し、東京に遊学しては常盤会寄宿舎に入り、五百木飄亭や新海非風らと共に子規が俳句を盛んに試み始めた頃からの友人であった。その句は『新俳句』に見えるが、その後は句作から遠のいた。しかし、東京に住んでいたので、碧梧桐とは晩年まで最も親しかった兄である(昭和二年没)。弟嫁六郎は明治九年生まれだが、五歳の時水腫病で没した。碧梧桐がことに父母から愛育されたのはこの弟の早死のせいもあったろう。

母せいは同藩竹村氏の出、悠容迫らぬつつしみ深い人で、情深く物惜しみをしなかったが、新しい物が好きで東京のニュースなど好んで聞いたという。父が謹厳篤学でありながらも剛毅果断なところがあり、上記のように諸国に奔走したことがあった点や、字が上手だったという点など、父母の気質が碧梧桐に受けつがれている点があったことが考えられる。

〔参考〕瓜生敏一「碧梧桐と父静渓先生」(『草茎』昭和28・11)。同「碧梧桐の家系」(同、昭和30・456)

幼少時と子規

友人寒川鼠骨の話[1]によると、幼少時の碧梧桐は色白く、眉目清秀で、身体がのびのびとして健康の標本のようだったとあるが、松山藩家老の嫡男で幼少時河東家にあずけられ、同家の一員のようになって教育を受けたことのある菅澗雪の思い出[2]によると、当時の碧梧桐は種々の遊びに長じ、芝居のまねや角力のまねをよくし、水泳も上手だったが、喧嘩はことに強く、いつも餓鬼大将だった。音楽の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com